広告
企画・制作
読売新聞社広告局

座談会 東日本大震災から5年。復興を支えた看護の力

# 看護職の使命は、心をつなぎ支えること

東日本大震災から5年を経た今も、看護職は被災地復興のために懸命に活動しています。
そこで、震災を経験し、その後も被災地の人々の医療と生活を支えている保健師、助産師、看護師の皆さんに仙台市にお集まりいただき、日本看護協会の坂本すが会長、中板育美常任理事と共に、5年間の歩みと今後の展望について語り合っていただきました。

〈左から〉司会進行役：中板さん、村上さん、佐々木さん、齊藤さん、坂本さん

## 復興とともに自身の成長を実感

**坂本** 本日は東日本大震災を経験し、現在も被災地復興に力を尽くしている看護職の皆さんにお集まりいただきました。皆さんをはじめ、震災時にはご自身が被災しながらも患者さんや被災者のために献身的に働いた看護職がたくさんいました。

**中板** 震災から5年が経ちましたが、新しく取り組んだことや、ご自身の意識の変化はありますか。

**佐々木** 私は、復興とともに自分も成長してきたという実感があります。2年前に市の職員として神戸市にうかがいました。そのときはとても勉強になった半面、復興の状況を見て焦りを感じました。ですが、その後、東北3県にはそれぞれに合った復興の進め方があることに気付き、焦らず普段の仕事を通して被災者支援につなげていこうと考えるようになりました。

**村上** 震災後、シングルマザー、若年層の妊娠、ドメスティックバイオレンスが増えていると感じます。そのため、家庭の様子をよく見るようになりました。また、精神科を受診する妊婦さんが増えているので、病院と地域の保健師が一緒になって「母子保健会議」を開催しています。若年層の妊娠については、助産師が地域の中学・高等学校に訪問し、性教育を行っています。

**齊藤** 私の病院では、津波による被害でライフラインが途絶え、病院としての機能が十分に果たせなくなってしまったので、患者さん約100人を他病院に移さざるを得なくなってしまいました。移送は大変な作業でしたが、皆で困難を乗り越えた経験が大きな自信になりました。退院が難しいと思われた患者さんにも一時退院をお願いしました。するとそのまま退院できる方が出てきました。そこで、「私たちが可能性の芽を摘んでいたのではないか」と反省し、退院支援に積極的に取り組み、退院後に訪問看護につなぐなど地域連携に力を入れるようになりました。

**坂本** 5年を経て、患者さんの力を信じ、目の前の変化にどう対応していくかを真摯に考えている皆さんの姿勢を知って「新しい芽が出てきている」という希望を感じました。

## 生活を考える視点と看護職の連携が大切

**坂本** 日本看護協会は昨年「看護の将来ビジョン」を発表し、医療の提供だけでなく生活を整える役割の重要性を謳っています。皆さんは「生活」の視点をどう捉えていますか。

**齊藤** 患者さんの生活を守ることは、看護師の重要な役割だと思います。

**村上** 妊婦さんに対しては、病院と地域の保健師が協力して必要な社会支援をする体制が整っています。

**坂本** 病気を治した後、無事出産した後の生活を支えるためには、看護職同士の連携が必要になります。震災時もそうした連携や協力体制があったと思いますが、それを次のステップに発展させられればと思っています。

**佐々木** 災害時に連携するためには、日ごろから協力し合っていること、顔が見える関係になっていることが大事だと感じます。かつては市町村間の保健師のつながりも薄れつつありましたが、最近は県の看護協会のサポートで研修などが開かれるようになり、保健師間の協力体制も強化されています。

**村上** 私も、普段から顔の見える関係づくりが大切だと思います。震災後、仮設住宅にお帰りいただくのが心配な妊婦さんがいたのですが、知り合いの保健師に相談すると市の保健室を用意してくれて助かりました。

## 忘れず、手を離さず医療と生活を支える

**中板** 震災の経験を踏まえて、看護職としてこれから目指していきたいこと、看護職の後輩たちや読者の皆さんに伝えたいことをお聞かせください。

**齊藤** 人は常に支え合って生きていると実感したので、挨拶や笑顔、「ありがとう」という感謝の気持ちをこれまで以上に大切にしていきたいです。専門知識を磨き、多職種との連携を大事にすることを後輩たちにも伝えていきたいです。被災者はまだ生活の不安があり、心の痛手も癒えていませんが、一歩でも前に進んでいこうと頑張っています。身体や心の心配があったら一人で悩まず、近くの看護職に相談してほしいですね。私たちは必ず力になります。

**村上** 私は震災時に院内での出来事を経験していない若い助産師に、自分たちがそこで見て、感じたことや学んだことを共有するように心がけています。毎年若い助産師が入職してきますので、周りの人たちと円滑なコミュニケーションが取れるように、新人教育にも力を入れています。コミュニケーション力を育てることはとても重要だと思います。

**佐々木** 私は自分の経験を人に話すことを心がけています。話すことで気持ちの整理がつきますし、他の方の話を聞くことで新しい気づきがあります。経験年数が私より短い人たちに人前で自分の経験を話すように勧めています。今後もそれぞれの経験を話して刺激し合い、成長していきたいと思います。

**坂本** 皆さんのお話を聞いて、「人は人とつながっていないと生きていけない」ことを深く感じました。日本看護協会は、震災での学びと看護職の働きを忘れず、「いつもそばにいる、手を離さない」という姿勢で被災地の5年間の変化を見据えながら、「医療と生活を支える」という使命を胸に、看護職と住民の皆さんをサポートし続けます。

日本看護協会 会長
**坂本 すが**さん
和歌山県出身。1972年和歌山県立高等看護学院保健助産学部卒業。同年和歌山県立医科大学附属病院入職。97年NTT東日本関東病院看護部長。2006年東京医療保健大学看護学科長・教授。大学教授として後進の指導にもあたる。2011年より現職。

宮城県
名取市保健センター
保健師
**佐々木 彩**さん
仙台市出身、入職8年目。震災当時は入職3年目で、同僚の保健師と共に不眠不休で働き、被災者支援に奮戦。住民に教えられ助けられることも多かった。

岩手県
岩手県立大船渡病院
助産師
**村上 直子**さん
一関市出身、入職12年目。震災時は病院に勤務中で、妊産婦さんを救急車やヘリコプターで内陸の病院に搬送する業務にあたった。

福島県
公益財団法人磐城済世会
舞子浜病院
看護師長
**齊藤 光子**さん
いわき市出身、入職34年目。震災時は病院の1階が浸水。孤立する病院で患者さんの他病院への移送や一時退院の準備に奔走。3カ月後の病院再開にも力を尽くした。

**被災地では、引き続き看護職の力が必要とされています。**
被災地での就業を希望される方はお近くの都道府県ナースセンターへご連絡いただくか、「eナースセンター」をご覧ください。
▶ eナースセンター https://www.nurse-center.net/nccs/

公益社団法人 日本看護協会 http://www.nurse.or.jp/